

## 試験準備に活性化した自尊心と時間的距離感が及ぼす影響 (2) — 成績予測の経時的变化<sup>1)</sup> —

藤島 喜嗣

### Effects of the activation of self-esteem and perceived temporal distance on the preparation for an examination (2): Temporal changes in performance prediction.

Yoshitsugu FUJISHIMA

Self-esteem is a global representation of the self that varies in its level of activation. Self-esteem should have an influence on future prediction depending on its activation level. According to the construal level theory, temporal distance moderates the influence of the activated self-esteem. Undergraduates ( $n=89$ ) participated in a panel survey on predictions about their examination performance, in which their level of self-esteem activation was manipulated. Contrary to the hypothesis, the valence of activated self-esteem did not influence predictions of the participants that were made five weeks before the exam, whereas it did influence their predictions made just after they completed the exam. It is concluded that perceived temporal distance moderated the effect of self-esteem on predictions that were made after the exam. The effects of acquiring new data on future outcomes and on contrasting optimistic predictions with the level of salient self-esteem that leads to self-verification are discussed.

*Key words* : self-esteem (自尊心), activation (活性化), perceived temporal distance (時間的距離感)

#### 問 題

##### 将来予測の楽観性とその修正

将来予測は楽観的に歪みやすい。すなわち、人には、望ましい結果が生じ、望ましくない結果が生じない見込みを客観的基準や実際の程度よりも高く見積もる傾向がある (Taylor & Brown, 1988; Armor & Taylor, 1998, 2002)。たとえば、Weinstein (1980) は、人が、様々な肯定的出来事は他者よりもたくさん経験するだろうと予測する一方で、様々な否定的出来事は他者よりもわずらかし経験しないだろうと予測することを見いだしている。また、Buehler, Griffin, & Ross (1994) では、課題にかかると予測した時間は、実際にかかった時間よりも短くなっており、課題完成時間に関して楽観的な予測をしていた。このような楽観的な予測

は、クリスマスプレゼントの購入にかかる時間 (Kruger & Evans, 2004) や授業に出席するコマ数 (村田・高木・高田・藤島, 2007) といった様々な課題で認められている。

しかし、このような楽観的予測は常に生じるわけではない。Shepperd, Ouellette, & Fernandez (1996) は、フィードバック期待状況での将来予測を経時的に測定した。具体的には、時点を変えて学生に試験得点を予測させた。その結果、試験1ヶ月前では楽観的だったが、試験直後には現実的な予測になっていた。さらに、試験成績がフィードバックされる直前には悲観的な予測となっていた。また、Taylor & Shepperd (1998) では、20%の確率で罹患し、重篤な結果をもたらす架空の医学的条件の検査を受診する、もしくはしないと教示し、自分の罹患確率を予測させた。そ

の結果、受診あり条件のみで20%を超える悲観的予測をした。さらに、この傾向は、時間経過と共に強くなった。受診なし条件では変化は生じなかった。これらの結果は、楽観的予測が修正されうること示唆している。このような修正を促す状況要因として、予測対象への時間的近接 (Shepperd et al., 1996)、代替結果の想像しやすさ (心的シミュレーションの容易さ; Sanna, 1999) などが指摘されている (Shepperd, Sweeny, & Carroll, 2006)。

Shepperd et al. (2006) は、楽観予測が状況要因の影響を受け修正される過程について複数の可能性を示唆している<sup>2)</sup>。そのひとつとして、時間経過に伴う新奇情報の獲得や異なる既有知識の利用などの情報への反応が指摘されている<sup>3)</sup>。たとえば、予測対象が時間的に遠方の場合、判断の基礎となる情報が存在するかもしれないが、その情報は漠然としている可能性がある。そのため、時間的に遠方な対象に対しては柔軟な予測が可能になり、願望などが入り込んで楽観的になると考えられる。その一方で、時間経過と共に、予測対象に直接関わる情報が獲得され、楽観的予測が修正される可能性が高まると考えられる。たとえば、Shepperd et al. (1996) では、卒業4か月前には楽観的だった大学4年生による給与予測が、卒業2週間前には下方修正された。大学2、3年生による予測は楽観的なまま変化しなかった。これは、実際に就職することになった大学4年生において新奇な情報が獲得されたからだと考えられる。

新奇情報が獲得されなかったとしても、楽観的予測が修正される可能性がある (Shepperd et al., 2006)。いくつかの理由で、予測に用いられる既有知識が予測時点によって異なることがあるからである。たとえば、説明責任 (accountability) の圧力がより複雑で詳細な情報処理を促進し、バイアス低減を促進することがありうる (Tetlock & Kim, 1987)。先行研究では、予測が確かめられるという予期が説明責任を意識させ、楽観主義を低減させることが見いだされている (Mackenna & Myers, 1997)。予測時点によって用いられる既有知識が異なることを示すもう一つの可能性として、解釈レベル理論 (Liberman, Trope, & Stephan, 2007; Trope & Liberman, 2003, 2010)。からの示唆がある。

### 解釈レベル理論と異なる既有知識の利用

解釈レベル理論は、心的距離と解釈レベルと呼ばれる認知的処理水準との関連を指摘した理論である。心的距離とは、自己を起点として認知対象に対して感じる距離であり、時間、空間、社会、反実仮想の4種が想定されている。解釈レベル理論によれば、これら心的距離は解釈レベルと関連がある。つまり、心的距離が遠くなるほど抽象的な高次処理がなされ、近くなるほど具体的な低次処理がなされると考えられている。その結果、心的距離は、対人認知、社会的推論、判断、自己制御、創造性課題遂行など広範囲の社会的認知過程に影響する (see for reviews, Liberman, Trope, & Stephan, 2007; Trope & Liberman, 2003, 2010)。

さらに、対象との心理的距離が遠いほど、抽象情報を判断に用いると考えられる。Nussbaum, Liberman, & Trope (2006) は、テストまでの時間が15分後と告げられた場合にはテストの形式などの具体的な情報の影響がみられるが、1ヶ月後と告げられた場合には具体的な情報の影響はみられなかった。また、樋口・埴田・藤島 (2010) は、将来予測に対する達成動機プライミングの影響は、イベントまでの時間的距離感が遠い場面のみみられることを示した。これは、達成動機が抽象的情報として機能した可能性を示している。これらのことは、予測に用いられる既有知識が予測時点によって異なることを示唆する。具体的には、遠い将来の予測に関しては目標などの抽象的な知識が利用され、近い将来の予測に関しては手段に関する知識のような、より具体的な知識が利用されると考えられる (Vallacher & Wegner, 1987)。そのため、時間的距離が遠い対象の予測は楽観的になりやすい一方で、近い対象の予測は現実的なものに修正されるのである (Shepperd et al., 1996)。

### 活性化した自己知識の影響

自己知識 (self-knowledge) は、抽象的な自己概念と具体的な自伝的記憶とに区分しうる (Klein & Loftus, 1993; 堀内, 2008; 榊, 2010)<sup>4)</sup>。これらの自己知識は、将来予測の楽観性に影響を及ぼすことが示されている。たとえば、藤島 (2002, 2007) は、肯定的な自伝的記憶を想起した場合には、将来予測の楽観性が促進されることを見いだ

している。

その一方で、非現実的楽観主義が自尊心 (self-esteem) と関連することが指摘されている (Taylor & Brown, 1988)。自尊心の捉え方には複数ありうるが、認知的側面を強調し、自己に関する全体的信念と捉えることもできる (Marsh & Craven, 2006; Shavelson, Hubner, & Stanton, 1976; Swann, Chang-Schneider, & McClarty, 2007)。この観点にもとづけば、自尊心は抽象的な自己知識である。本研究では、将来予測に対する自己知識としての自尊心の影響を検討する。

この立場に基づくと、活性化レベルが問題となる。Markus & Wurf (1987) は、一時的に活性化レベルが高まっている自己概念のことを作動的自己概念 (working self-concept) と呼び、この作動的自己概念こそが認知や社会的判断に影響をおよぼすと主張した。つまり、抽象的自己知識である自尊心は活性化してはじめてその影響が後続の認知、判断に現れると考えられる。

これまでに活性化した自尊心の影響は、課題や試験に対する成績予測として検討されている (藤島, 2000, 2004)。たとえば、藤島 (2000) では、事前に自尊心尺度に回答させることで自尊心を活性化し、レポート課題の成績予測をさせている。その結果、自尊心を活性化させた場合、高自尊心者よりも低自尊心者の方が課題提出後の予測に近い予測をしていた。このような効果は自尊心を活性化させなかった場合には認められなかった。藤島 (2000) の結果は、最初の予測において活性化した自尊心の感情価に対応した予測が行われたことを示している。その一方で、藤島 (2004) では、高自尊心が活性化するとむしろ楽観性が弱まることが見いだされている。これらは将来予測に対する活性化した自尊心の影響が、促進的であったり、抑制的であったりする可能性を示しており、他の調整要因の存在を示唆している。そこで本研究は、試験成績予測の楽観性に活性化した自尊心 (self-esteem) が影響するか、自尊心活性化の影響が試験までの時間的距離によって調整されるかを検討する。自尊心は自己知識の中でも抽象的な情報であると考えられる。先の解釈レベル理論に基づくと、自尊心が活性化した場合、予測対象への時間的距離が近い場合よりも遠い場合に影響を及ぼし、自尊心の感情価に沿った予測がなされるだ

う。Shepperd et al. (1996) の手続きに沿って考えると、試験直後の予測よりも数週間前 (本研究では5週間前) の予測において活性化した自尊心の影響が見られるだろうし、数週間前の予測においても、時間的距離感が近い場合よりも遠い場合に活性化した自尊心の影響が見られるだろう。本研究では、これを検証することとした<sup>5)</sup>。

## 仮説

試験5週間前の得点予測に関して次のような仮説を立てた。試験までの時間的距離を遠く感じている場合、自尊心が活性化したときには、低自尊心者よりも高自尊心者の方が高い得点予測を行うだろう。自尊心が活性化していないときには、このような自尊心差は生じないだろう。これは、時間的距離感×活性化×自尊心の二次の交互作用効果の予測を意味する。その一方で、試験直後の得点予測においては活性化した自尊心は影響を及ぼさず、時間的距離感の調整効果も認められないだろう<sup>6)</sup>。

## 方法

### 実験参加者

東京都内大学生89名 (男性37名、女性52名、平均年齢19.43歳、 $SD = 2.73$ ) が参加した。本研究では質問紙調査を2回実施し、両方に回答した者を対象とした。このサンプルは藤島 (2011) と同一である。

### 手続き

本研究の手続きは藤島 (2011) と同一である。心理学概説科目の授業とその期末試験を利用し、質問紙によるパネル調査を実施した。期末試験約5週間前に集合状況で第1回目の調査を実施した。実施前に、試験の日程及び試験の方法について基本的な説明を行った。具体的には、試験時間は60分であること、試験成績は単位評価全体の6割を占めること、複数の形式の問題を出す、論述問題に関しては事前に問題を公開することを説明した。その後、成績とは全く無関係であるが、大学生の勉強スタイルについて研究していると告げ、研究協力に関する倫理的説明を行い、研究協力への同意を求めた。



これらの説明後、質問紙を配布した。このとき、質問紙の種類を変えることで、参加者を活性化（あり・なし）の2条件に無作為に配置した。最初に、試験までの時間的距離感を評定させた。具体的には、試験実施日を想像したとき、どれくらい先のことと感ずるか、「非常に近く感じる」から「非常に遠く感じる」、「もうすぐそのように感じる」から「まだまだ先のように感じる」の2項目6件法でたずねた。これらの項目は、樋口・埴田・藤島（2010）で用いた項目と同一のものであった。

活性化あり条件では、Rosenberg自尊心尺度日本語版（10項目5件法；山本・松井・山成，1982）に回答させた。その後、試験勉強に関する質問に回答させ、試験成績を100点満点中何点とれると思うかで回答させた。活性化なし条件では、試験勉強と成績について回答後にRosenberg自尊心尺度日本語版に回答した。このように、予測前に自尊心尺度への回答を行うか否かで、自尊心活性化の操作が可能になると考えた。

試験終了直後に第2回目の調査を実施した。実際に試験勉強を何時間行ったかの回答とあらためて試験で100点満点中何点とれると思うかの回答を求めた。試験勉強に関わる時間の予測と実際に関する結果は、既に藤島（2011）で報告済みである。本研究では、未検討である試験告知時点での成績予測と試験終了直後における成績予測の結果に関して報告する。

## 結 果

### 指標の作成

独立変数に関して、活性化あり条件を+1、活性化なし条件を-1にコード化した。時間的距離感の2項目は高い正相関を示したので（ $r = .84, p < .001$ ）平均し、平均値2.98で中心化した（ $SD = 1.13$ ）。次に、自尊心尺度の信頼性を確認した上で（ $\alpha = .86$ ）、合計し、平均値30.72で中心化した（ $SD = 7.79$ ）。さらに、活性化、時間的距離感、自尊心の各指標から1次、2次の交互作用指標を算出した。

### 予測の経時的変化

試験5週間前の予測得点と試験直後の予測得点

を比較するため、サンプル全体で対応のある $t$ 検定を行った。その結果、5週間前（ $M = 67.21, SD = 11.67$ ）よりも試験直後（ $M = 61.67, SD = 15.34$ ）の方が低かった（ $t = 3.96, df = 82, p < .001$ ）。この結果は、Shepperd et al.（1996）と同様、将来予測の下方修正が行われたことを示している。

予測の修正がどの時点でどのように行われたかを確認するため、試験5週間前の得点予測を基準変数とし、時間的距離、活性化および自尊心の主効果指標、時間的距離×活性化、時間的距離×自尊心、活性化×自尊心の1次交互作用指標、時間的距離×活性化×自尊心の2次交互作用指標を説明変数とした重回帰分析を実施した。その結果、モデルは有意とならず（ $R^2 = .04, ns$ ）、また、すべての変数の回帰係数が有意でなかった（ $|\beta|s < .12, ts < 1.15, ns$ ；表1）。

次に、試験直後の得点予測を基準変数とし、時間的距離、活性化および自尊心の主効果指標、時間的距離×活性化、時間的距離×自尊心、活性化×自尊心の1次交互作用指標、時間的距離×活性化×自尊心の2次交互作用指標を説明変数とした重回帰分析を実施した。その結果（表1）、モデルは有意とならなかった（ $R^2 = .12, ns$ ）。各変数の係数をみると、活性化×自尊心の交互作用効果が有意となり（ $\beta = .23, t = 2.03, p < .05$ ）、時間的距離感×活性化の交互作用効果が有意傾向となった（ $\beta = -.21, t = -1.88, p = .06$ ）。活性化×自尊心の交互作用効果を具体的に解釈するために、活性化条件別で非標準化偏回帰係数に基づく予測式を算出した。その結果（図1）、活性化なし条件では“ $\hat{y} = 62.45 - .52 * \text{自尊心}$ ”、活性化あり条件では“ $\hat{y} = 58.94 + .42 * \text{自尊心}$ ”となり、いずれも単純傾斜は有意ではなかった（ $|t|s < 1.45, ns$ ）。見方を変えて自尊心の高低別で非標準化偏回帰係数に基づく予測式を算出した。自尊心の高低には±1SDの値を用いた。その結果、低自尊心群では“ $\hat{y} = 61.06 - 5.38 * \text{活性化}$ ”となり、単純傾斜は有意であった（ $t = -2.18, p < .05$ ）。5週間前に低自尊心が活性化していると、試験直後に得点を低く予測する傾向にあった。これに対し、高自尊心群では“ $\hat{y} = 60.33 - 1.89 * \text{活性化}$ ”となり、単純傾斜は有意でなかった（ $t < 1, ns$ ）。

さらに、時間的距離感×活性化の交互作用効果を具体的に解釈するために、活性化条件別で非標

表1 各時点の成績予測に対する標準偏回帰係数

	試験5週前	試験直後	試験直後 (統制後)
試験5週前の予測	-	-	.60***
時間的距離感	.02	-.14	-.15
活性化(-1:なし, +1:あり)	-.08	-.11	-.07
自尊心	.09	-.02	-.07
時間的距離感×活性化	-.05	-.21†	-.19*
時間的距離感×自尊心	-.020	.13	.14
活性化×自尊心	.12	.23*	.16†
時間的距離感×活性化×自尊心	-.07	.16	.20*
$R^2$	.04	.12	.47***

註) \*:  $p < .05$ , \*\*:  $p < .01$ , \*\*\*:  $p < .001$ , †:  $p < .10$ 。試験直後(統制後)とは、試験5週間前の成績予測を説明変数に投入した場合の結果である。

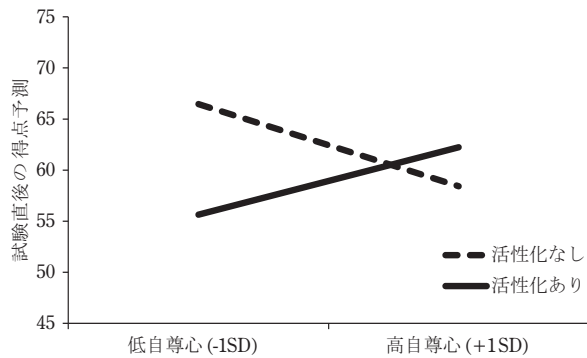


図1 活性化×自尊心別に算出した試験直後の得点予測の予測値

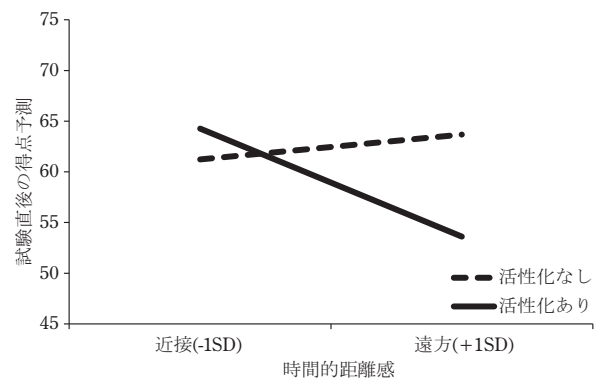


図2 時間的距離感×活性化別に算出した試験直後の得点予測の予測値

標準偏回帰係数に基づく予測式を算出した。その結果(図2)、活性化なし条件では“ $\hat{y} = 62.45 - 1.09 \times \text{時間的距離感}$ ”となり、単純傾斜は有意ではなかった( $t < 1$ , ns)。活性化あり条件では“ $\hat{y} = 58.94 - 4.70 \times \text{時間的距離感}$ ”となり、単純傾斜は有意であった( $t = -2.07$ ,  $p < .05$ )。その高低に関わらず、5週間前に自尊心が活性化し、時間的距離を遠く感じていたほど、試験直後の得点予測は低くなった。見方を変えて、時間的距離感の遠近別で非標準化偏回帰係数に基づく予測式を算出した。時間的距離感の遠近には $\pm 1SD$ の値を用いた。その結果、時間的距離が近接していると感じた場合、“ $\hat{y} = 62.75 + 1.52 \times \text{活性化}$ ”となり、単純傾斜は有意ではなかった( $t < 1$ , ns)。これに対し、時間的距離が遠方と感じた場合では“ $\hat{y} = 58.64 - 5.01 \times \text{活性化}$ ”となり、単純傾斜は有意で

あった( $t = -2.03$ ,  $p < .05$ )。試験5週間前に時間的距離を遠方と感じている場合、その高低に関わらず自尊心が活性化すると、試験直後の得点予測が低くなる傾向にあった。

試験5週間前から試験直後にかけて予測の下方修正の変化量に違いは見られるだろうか。そこで、試験直後の得点予測を基準変数とし、説明変数としてこれまでに加え試験5週間前の得点予測を投入し、統制した分析も行った。その結果(表1)、モデルは有意となった( $R^2 = .47$ ,  $p < .001$ )。試験5週間前の得点予測の主効果( $\beta = .60$ ,  $t = 6.83$ ,  $p < .001$ )、時間的距離感×活性化の交互作用効果( $\beta = -.19$ ,  $t = 2.08$ ,  $p < .05$ )が有意となった。また、活性化×自尊心の交互作用効果が有意傾向となった( $\beta = .16$ ,  $t = 1.81$ ,  $p = .08$ )。これらの結果は、先の分析結果と一致するものであった。

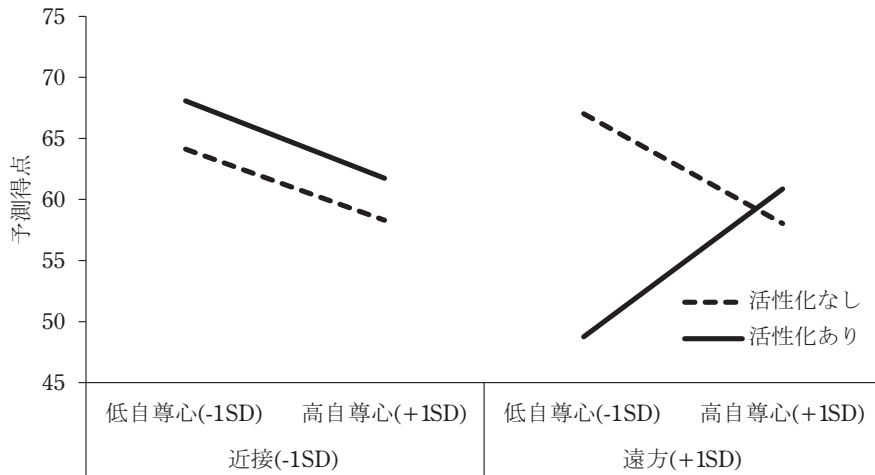


図3 活性化×時間的距離感別に見た試験直後の得点予測変化に対する自尊心の効果

ただし、今回の分析では、これらの効果に加えて、時間的距離感×活性化×自尊心の交互作用効果 ( $\beta = .20, t = 2.15, p < .05$ ) が有意となった。他の効果は見られなかった ( $|\beta|s < .17, ts < 1.81, ns$ )。

2次の交互作用効果を具体的に解釈するために、時間的距離感×活性化で非標準化偏回帰係数に基づく予測式を算出した。5週間前の得点予測は平均値を用いた。その結果、時間的距離感が近接している (-1SD) と感じている場合、活性化なし条件では “ $\hat{y} = 61.25 - .37 * \text{自尊心}$ ” となり、単純傾斜は有意でなかった ( $t < 1, ns$ )。活性化あり条件では “ $\hat{y} = 64.90 - .41 * \text{自尊心}$ ” となり、単純傾斜は有意ではなかった ( $t = 1.35, ns$ )。時間的距離感が遠方 (+1SD) に感じている場合、活性化なし条件では “ $\hat{y} = 62.52 - .58 * \text{自尊心}$ ” となり、単純傾斜は有意でなかった ( $t = 1.92, ns$ )。活性化あり条件では “ $\hat{y} = 54.81 + .78 * \text{自尊心}$ ” となり、単純傾斜は有意であった ( $t = 2.24, p < .05$ )。5週間前に活性化させた自尊心が高いほど予測得点は高く、自尊心が低いほど予測得点は低くなった (図3)。

### 考 察

全体的にみて、試験5週間前よりも試験直後の方で予測得点が低かった。実際の成績との比較ができないので、予測の楽観性に関しては確たる証拠は得られないが、時間経過と共に成績予測が下

方修正された。これは、Shepperd et al. (1996) と同様の結果が得られたことを示している。さらに、時間経過に伴う成績予測の下方修正は、試験5週間前に試験を遠くに感じていて、低自尊心が活性化した場合に顕著であった。しかし、仮説に反し、試験5週間前の得点予測に活性化した自尊心は影響せず、時間的距離感による調整効果もなかった。むしろ試験直後の得点予測への影響を示唆した。

上記の結果は、自尊心が遠い将来の予測に用いられない可能性を示唆する。その一方で、先行研究では方向は異なるものの将来予測に対する活性化した自尊心の影響が示唆されている (藤島, 2000, 2004)。これらのことを考えると、自尊心は自己に関する抽象情報であると考えられるが、その内容が予測対象と対応しなかったのかもしれない (藤島, 2011)。たとえば、自尊心は対人関係の良好さに依拠するものであり、その影響も対人関係に特化したものかもしれない (Leary & Baumeister, 2000; Leary & MacDonald, 2003)。類似した考えとして、自尊心の基盤には個人差があると考えられる (Tafarodi & Swann, 2001; Crocker & Wolfe, 2001; Crocker & Park, 2003)。これらによれば、少なくとも、学業場面における自己評価と自尊心が随伴する個人でないと、自尊心は学業場面の将来予測に影響しないと考えられる。先行研究における結果の混乱をあわせて考えると、自

自尊心の影響が、通状況的ではなく、限定されたものである可能性がある。今後、自尊心の基盤と予測対象の領域対応と時間的距離の違いを考慮した検討を行う必要があるだろう。

それでは、試験5週間前という時間的に遠方である場合の予測には、何が反映したのだろうか。先行研究にもとづけば(樋口ら, 2010)、良い成績を取りたいという願望、社会的望ましさが影響した可能性がある。本研究で扱った自尊心の個人差や活性化の操作は、これらの願望や社会的望ましさとは直接関連しないと考えられる。そのため、設定した要因の効果が認められなかったのだろう。本研究では、基準としての独立性や倫理的問題に配慮し、実際の試験成績をデータとして用いていない。そのため、予測と実際の比較ができず、試験5週間前の予測が楽観的であったかどうか、確かめることは言えないが、先行研究にもとづけば楽観的予測であったことが示唆される。

試験5週間前の成績予測には活性化した自尊心の影響が見られなかった一方で、試験直後の予測には5週間前に活性化した自尊心の影響が認められた。この結果に対するもっとも消極的な解釈は、試験勉強時間との対応である。藤島(2011)において、試験を遠方に感じており、低自尊心を活性化させた人が自己確証的に勉強しなかったことが見いだされている。実際の試験勉強時間が予測に関する新奇情報としてはたらき、楽観的予測が修正された可能性がある(Shepperd et al., 1996)。このことは、事象に対する期待との一致よりも自己概念との一致が優先されることを意味しており、自己動機における自己確証動機(self-verification motive; Swann, Rentfrow, & Guinn, 2003; Swann & Bosson, 2010)の強さを示唆する。

もうひとつの解釈として、楽観的予測と自尊心尺度回答の記憶との対比がある。試験5週間前に試験を遠方に感じていた人は、近く感じていた人と比べて、試験直後に、自分がかつて楽観的な成績予測を行ったことの他に、自尊心尺度に回答したことを同時に想起した可能性がある。心的距離と情報処理に利用される知識の抽象度には対応があるので(Nussbaum, Liberman, & Trope, 2006)、試験5週間前の時点で試験を近く感じていた人よりも遠く感じていた人の方で、抽象情報である自尊心が顕現的であり、エピソードとして記憶痕

跡を残しやすかったと考えられる。試験直後にこれらのことを想起する際、高自尊心者においては、楽観的な予測をしたことと自らが高自尊心であることを表明したことは矛盾しない。その一方で、低自尊心者は、自らが低自尊心であると表明したにも関わらず、楽観的な予測をしてしまったことになる。この対比が予測修正を相対的に大きくしたかもしれない。試験5週間前の時点で試験を近く感じていた人では、相対的に自尊心は顕現的でなく、エピソードとしての記憶痕跡を残しづらかったかもしれない。そのため、試験直後の時点で自尊心に回答したことを想起せず、予測修正に活性化した自尊心の差が生じなかったと考えられる。以上の解釈は複雑かつ後付け的な要素が強い。今後、理論的な整理を行った上での検討が必要である。

## 註

- 1) 本研究は平成20-22年度科学研究費補助金(若手研究(B)21730498)の助成を受けて行われた。また、本研究の一部は日本グループ・ダイナミックス学会第58回大会(2011年, 昭和女子大学)でポスター発表された。
- 2) その他の可能性として防衛的悲観主義(defensive pessimism; Norem, 2001)などが指摘されている(Shepperd et al., 2006)。
- 3) この他にも、情報としての気分(mood as information; Schwarz & Clore, 1988)が指摘されている。本論文では気分を変数として扱わなかったため、ここではこれ以上の議論は行わない。
- 4) 自己概念と自伝的記憶との関係に関して、独立した記憶システムを想定するのか(堀内, 2008)、単なる抽象度の相違として階層構造を想定するののかには論争がある(see for a review, 榊, 2010)。本研究においては、抽象レベルにあるとされる自己概念の中でも抽象的と考えられる自尊心を扱っている。その意味において、本研究は記憶システムの独立性の議論には寄与しない。
- 5) 本研究は、藤島(2011)とサンプルと手続きを共有しているが、従属変数が異なる。藤島(2011)では、試験勉強時間に関する予測と



実際のズレに関して活性化した自尊心の影響と時間的距離感の調整効果に関する検討を行った。これに対し、本研究は、試験前と試験直後の2時点における成績予測の変化を検討するものである。本研究は、従属変数の相違だけではなく、実際の成績について検討せず、予測変化をもたらす要因について検討している点でも藤島(2011)とは異なる。

- 6) 以上のことから、試験5週間前から試験直後までの得点予測変化については時間的距離感×活性化×自尊心の二次の交互作用効果を予測することになる。

### 引用文献

- Armor, D.A., & Taylor, S.E. (1998). Situated optimism: Specific outcome expectancies and self-regulation. In M. P. Zanna (ed.) *Advances in experimental social psychology*, Vol.30. New York: Academic Press. Pp.309-379.
- Armor, D.A., & Taylor, S.E. (2002). When predictions fail: The dilemma of unrealistic optimism. In T. Gilovich, D. Griffin, & D. Kahneman (eds.) *Heuristics and biases: The psychology of intuitive judgment*. Cambridge, UK: Cambridge University Press, Pp.334-347.
- Buehler, R., Griffin, D., & Ross, M. (1994). Exploring the "planning fallacy": Why people underestimate their task completion times. *Journal of Personality and Social Psychology*, **67**, 366-381.
- Crocker, J., & Wolfe, C. T. (2001). Contingencies of self-worth. *Psychological Review*, **108**, 593-623.
- Crocker, J., & Park, L. E. (2003). Seeking self-esteem: Construction, maintenance, and protection of self-worth. In M. R. Leary, & J. P. Tangney (Eds.), *Handbook of self and identity*. New York: Guilford Press. Pp.291-313.
- 藤島喜嗣 (2000). 計画錯誤に対する自尊心への自己注目の効果. 日本社会心理学会第41回大会発表論文集, Pp.222-223.
- 藤島喜嗣 (2002). 自己の否定的側面への注目が計画錯誤に及ぼす効果. 日本社会心理学会第43回大会発表論文集, Pp.386-387.
- 藤島喜嗣 (2004). 課題成績における非現実的楽観主義に客体的自己覚知状態が及ぼす効果. *学苑 人間社会学部紀要*, **761**, 106-115.
- 藤島喜嗣 (2007). 計画錯誤に焦点化された自己検索が及ぼす効果. 日本心理学会第71回大会発表論文集, Pp.220.
- 藤島喜嗣 (2011). 試験準備に活性化した自尊心と時間的距離感が及ぼす影響: 勉強時間における予測と実際. *学苑 人間社会学部紀要*, **844**, 1-9.
- 堀内 孝 (2008). 記憶システムの中の自伝的記憶. 佐藤浩一・越智啓太・下島裕美 (編著) *自伝的記憶の心理学*. 北大路書房, Pp.90-102.
- 樋口 収・埴田健司・藤島喜嗣 (2010). 達成動機づけと締め切りまでの時間的距離感が計画錯誤に及ぼす影響. *実験社会心理学研究*, **49**, 160-167.
- Klein, S.B., & Loftus, J. (1993). The mental representation of trait and autobiographical knowledge about the self. In T. K. Srull, & R.S. Wyer, Jr. (Eds.), *Advances in social cognition*. Vol. V: *The mental representation of trait and autobiographical knowledge about the self*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. Pp.1-49.
- Kruger, J., & Evans, M. (2004). If you don't want to be late, Enumerate: Unpacking reduces the planning fallacy. *Journal of Experimental Social Psychology*, **40**, 586-598.
- Leary, M.R., & Baumeister, R.F. (2000). The nature and function of self-esteem: Sociometer theory. In M. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, Vol.32, San Diego, CA: Academic Press. Pp.1-62.
- Leary, M.R., & MacDonald, G. (2003). Individual differences in trait self-esteem: A theoretical integration. In M.R. Leary, & J.P. Tangney (Eds.), *Handbook of self and identity*. New York: Guilford Press. Pp.401-418.
- Lieberman, N., Trope, Y., & Stephan, E. (2007). Psychological distance. In A. W. Kruglanski & E. T. Higgins (Eds.), *Social psychology: Handbook of basic principles*. Vol.2. New York: Guilford Press. Pp.353-383.



- 村田光二・高木 彩・高田雅美・藤島喜嗣 (2007). 計画錯誤研究の現場研究—活動の過大視, 障害想像の効果, 時間厳守性との関係—. *一橋社会科学*, **2**, 191-214.
- Mackenna F. P., & Myers, L. B. (1997). Illusory self-assessments: Can they be reduced? *British Journal of Psychology*, **88**, 39-51.
- Markus, H., & Wurf, E. (1987). The dynamic self-concept: A social psychological perspective. *Annual Review of Psychology*, **38**, 299-337.
- Marsh, H. W., & Craven, R. G. (2006). Reciprocal effects of self-concept and performance from a multidimensional perspective: Beyond seductive pleasure and unidimensional perspectives. *Perspectives on Psychological Science*, **7**, 133-163.
- Norem, J. K. (2001). Defensive pessimism, optimism, and pessimism. In E. C. Chang (Ed.), *Optimism and Pessimism: Implications for theory, research, and practice*. Washington, DC: American Psychological Association. Pp.77-100.
- Nussbaum, S., Liberman, N., & Trope, Y. (2006). Predicting the near and distant future. *Journal of Experimental Psychology: General*, **135**, 152-161.
- 榑美知子 (2010). 自己知識とそのはたらき. 村田光二 (編) 現代の認知心理学6 社会と感情. 北大路書房, Pp.49-73.
- Sanna, L. J. (1999). Mental simulations, affect, and subjective confidence: Timing is everything. *Psychological Science*, **10**, 339-345.
- Schwarz, N. & Clore, G. L. (1988). How do I feel about it? Informative functions of affective states. In K. Fiedler, & J. P. Forgas (Eds.), *Affect, cognition, and social behavior*. Toronto, Ontario, Canada: Hogrefe. Pp.44-62.
- Shavelson, R. J., Hubner, J. J., & Stanton, G. C. (1976). Validation of construct interpretations. *Review of Educational Research*, **46**, 407-441.
- Shepperd, J. A., Ouellette, J. A., & Fernandez, J. K. (1996). Abandoning unrealistic optimism: Performance estimates and the temporal proximity of self-relevant feedback. *Journal of Personality and Social Psychology*, **70**, 844-855.
- Shepperd, J. A., Sweeny, K., & Carroll, P. J. (2006). Abandoning optimism in predictions about the future. In L. J. Sanna & E. Chang (Eds.), *Judgments over time: The interplay of thoughts, feelings and behaviors*, New York: Oxford University Press. Pp.13-33.
- Swann, W. B., Jr., & Bosson, J. K. (2010). Self and identity. In S. T. Fiske, D. T. Gilbert, & G. Lindzey (Eds.), *Handbook of social psychology (5th ed.)*. New York: McGraw-Hill. Pp.589-628.
- Swann, W. B., Jr., Chang-Schneider, C., & McClarty, K. (2007). Do our self-views matter? Self-concept and self-esteem in everyday life. *American Psychologist*, **62**, 84-94.
- Swann, W. B., Jr., Rentfrow, P. J., & Guinn, J. S. (2003). Self-verification: The search for coherence. In M. R. Leary, & J. P. Tangney (Eds.), *Handbook of self and identity*. New York: Guilford Press. Pp.367-383.
- Tafarodi, R. W., & Swann, W. B., Jr. (2001). Two-dimensional self-esteem: Theory and measurement. *Personality and Individual Differences*, **31**, 653-673.
- Taylor, S. E., & Brown, J. D. (1988). Illusion and well-being: A social psychological perspective on mental health. *Psychological Bulletin*, **103**, 193-210.
- Taylor, K. M., & Shepperd, J. A. (1998). Bracing for the worst: Severity, testing and feedback as moderators of the optimistic bias. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **24**, 915-926.
- Tetlock, P. E., & Kim, J. I. (1987). Accountability and judgment processes in a personality prediction task. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 700-709.
- Trope, Y., & Liberman, N. (2003). Temporal construal. *Psychological Review*, **110**, 403-421.
- Trope, Y., & Liberman, N. (2010). Construal level theory of psychological distance. *Psychological Review*, **117**, 440-463.
- Vallacher, R. R., & Wegner, D. M. (1987). What do people think they're doing? Action identification and human behavior. *Psychological Review*, **94**, 3-15.

Weinstein, N.D. (1980). Unrealistic optimism about future life events. *Journal of Personality and Social Psychology*, **39**, 806-820.

山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造. 教育心理学研究, **30**, 64-68.

---

ふじしま よしつぐ (昭和女子大学大学院生活機構研究科)